作品解説　在りし日の歌

【作者】
中原中也は、明治４０（１９０７）年、山口市の湯田温泉で生まれました。父は医者で開業していました。山口中学や立命館中学を経て、東京外国語学校専修科を修了しています。詩集『山羊の歌』『在りし日の歌』を残し、満３０歳で昭和１２（１９３７）年に亡くなりました。難しい人物であったと言われています。

【作品】
２歳の長男の文也（ふみや）を亡くし、体調を崩した中也が、死に先立ちまとめた詩集が『在りし日の歌』です。原稿を小林秀雄（こばやしひでお）に託して亡くなりました。

在りし日の歌　中原中也

閑寂

なんにも訪ふことのない、私の心は閑寂だ。
　それは日曜日の渡り廊下、―みんなは野原へ行つちやつた。
板は冷たい光沢をもち、小鳥は庭に啼いてゐる。
　締めの足りない水道の、蛇口の滴は、つと光り！
土は薔薇色、空には雲雀　空はきれいな四月です。
　なんにも訪ふことのない、私の心は閑寂だ。

春宵感懐

雨が、あがつて、風が吹く。雲が、流れる、月かくす。

みなさん、今夜は、春の宵。なまあつたかい、風が吹く。
なんだか、深い、溜息が、なんだかはるかな、幻想が、
湧くけど、それは、摑めない。　誰にも、それは、語れない。
誰にも、それは、語れない。ことだけれども、それこそが、
いのちだらうぢやないですか、けれども、それは、示かせない・・・・・
かくて、人間、ひとりびとり、こころで感じて、顔見合わせれば
にっこり笑ふというほどの、ことして、一生、過ぎるんですねえ
雨が、あがって、風が吹く。雲が、流れる、月かくす。
みなさん、今夜は、春の宵。なまあつたかい、風が吹く。

★テキストは、『日本詩人全集２２　中原中也』（新潮社）をもとにしています（一部加工しています）。